令和３年１月３０日（土）

いのちの躍動の舞――最も大切なもの　　第３回の構想

　「起きねばや」と「身も心も放ち忘れる」

・問い

「ありのままの自分」　それでよいのか？　と初めて疑問を感じたのが、16歳。

　打算と忖度のみで生きる自分

　姿勢も、たいていダラッとしてるけど、人目上必要なときは、それっぽくする。

　世の中は完全にこれで過ごしていけるが、それでよいのか？

・「ディオニュソス的なもの（ディオニュソス的舞踊）」が人間形成の根柢に働いている、

ここに、偽りの「ありのままの自分」を超えて生きる道があることを知らされた。

・その探求の道の参考となるもの：

　西田幾多郎。ゲーテ。フィディアス作ディオニュソス。

●西田幾多郎

　「絶対矛盾的自己同一」

　・「ここがロドスだ、ここで跳べ」　苦しみの真っただ中のバラ。

　・責任。問われている。今ここが決する場所。

　・ディオニュソス的なもの（ディオニュソス的舞踊）

　　これに関しては、ハリソン。死んで起きる。Rising up form。

　　この具体的なもの：フィディアス作ディオニュソス。

●ゲーテ

・「自然と個性」（ありのままの自分と、持前を発揮した自分）ここに問題あり。

　（倫社の教科書）

　今のままの自分でいいのか、努力は？（普通にしてると、まぁまぁこのままでいいんだけど、しょうがないからちょっと打算で努力したほうが得かな？　くらいで生きているが）

　芸術とは（作品を作るとは）？　真の美とは？

「本当の美とは？」「本当の自然とは？」

これを深くとらえたのがゲーテ。

「本当に優れた芸術作品を見ると、それは理屈や感情、感覚では届かない。それで自分を投げ出すしかない。その中で人間は変わるんだ」とゲーテ述べている。

　私の体験がまさにそうだった。私の坐禅や普段の姿勢が変わったのは、なんでか自分でもよくわかっていなかったけど、ゲーテが一番はっきり書いてくれていた。

　ゲーテがこの問題に、どのように取り組み、どのようなアドバイスを与えたか、見ていく。

・遺言ともいうべき「若き詩人へ送る言葉」

「自然」もこのままだ、でなくで、各自が努力する中で、自然が磨き上げられていく、本当の自然が創造される、これ生きること。本当に優れた芸術家はこれをやってくれている。この美に触れ学べる。

　こういう人間の努力の中で、永遠の努力の中で磨き上げられる自然。

　このような次元で「自然」をとらえたのがゲーテである。

　natureのラテン語は、産み出すという意味。新たに生み出す、その働き。

　人間もその方向の中にいる。

（倫社の教科書にも載っていた。ゲーテの遺言でも、これが問題になっている。）

・真実とらしいもの。

・芸術家へのアドバイス（エッカーマンとの対話）

　モーツァルトとダビンチの言葉を引用。

　遠近法と人体解剖学を学ぶこと。これ個性を発揮するために必要。**プラスアルファあり**。

エッカーマンとの対話。

　芸術家へのアドバイス。（●ここもちゃんと見よう）

　ゲーテに詩を書いて送ってくる。ゲーテがどう答えたか。

　モーツァルトを引用。基本を学べ。それ学んでいないと、力が発揮されない。素人は基本を学んでいず、素質あっても発揮されていないか、人まねになっているかのどちらか。ゲーテはそれ引用して、全くその通りと言っている。

　ダビンチも引用している。「画家になるには、まず遠近法と人体解剖学を学べ。これないしに持前を発揮した絵はかけない。自己流になりやすいから先生にもつけ」と。私も全く同意。こういう学びも絶対に必要。当然。彫刻家でも人体解剖学を学ばずに作れるはずない。

　これだけなら誰でも言うし、みんな納得のことだろう。

　ゲーテはさらに奥義を言っている。「私が若いころには全く想像もできなかった恩恵が今の芸術家は受けられる」　何と思いますか？　ゲーテは1732年生まれ。１８世紀には想像もできなかった恩恵。

　「パルテノン神殿の上にあった彫刻がロンドンで間近で見られる。」

・ヴィンケルマン。

・「彫刻家へのアドバイス」　ゲーテの「魂のアドバイス」といえよう。

　彫刻家よ。（生きることの芸術家よ）

　ロンドン行って、見ろ。できるだけ長く過ごせ。ここに本当の泉ある。

　最も熱心に「スタディ」しろ。「勉強」とか「これを勉めよ」と多くの禅の師匠もいうが、この「スタディ（勉強）」の具体的な意味や仕方を私が教わったのはゲーテから。

　どこまでも無限に学んでいける。

　ゲーテは絵を送ってもらったり、人にも勧める。

　持前を発揮させる。発揮しないとわからないまま死んでいまう。新たな発現。これをうながす勉強。（わかったことを教える勉強でなく、双方に新たな何かが現われる勉強あり！）  
　坐禅もこれ。人間の知恵、学んだことや、クセでない、それに死んで起き上がる。ここに命の本当の「泉」がある。本当の勉強がある。私がゲーテから学んだこと。

　そこから何学べるか？　人間の力ではとうてい届かないものの前に頭を下げるしかない。ああ変えてくれる。そういう何か。恩恵。

これが命の躍動の舞。ディオニュソス的なもの（ディオニュソス的舞踊）。

　　（西田幾多郎からこれを学んでいこう）

・マイスターの遍歴時代の最後。フィディアスは…。

・プロ…序。投げ捨てて、変えられる。

　想像力や感覚も大事。それで味わえる部分ある。が、それでは決して届かない！　これを本当の芸術作品は突き付けてくれる。これを突き付けられるとき、人間は変わる。命の躍動にふれる。

●フィディアス作ディオニュソスから学ぶ

●『プロピュレーエン』序言（1798年）（新井靖一訳）から。

　芸術家にたいしてなされるもっとも高尚な要求はつねに、**自然をよすがとして、これを研究し、自然を模倣し、自然の現象に似たものを生み出すべきである**という、このことである。

　この要求がいかに大きいもの、「いな途方もないものであるかは、かならずしも十分に考慮されているとはいえない。真の芸術家でさえ修業が進んでゆくにしたがってようやくこのことを知るにいたる。**自然は芸術と非常な深淵によって隔てられており、天才ですらも外的手段なしにはこれを超えることはできないのである**。

　（芦津訳だと「**途方もない深淵によって分け隔てられ**」）

　自分の芸術作品に、**自然であると同時に自然を超えるものと思われるような内容と形式を与えうる**ということは、とりわけ近代においては、一層稀になっている。

イタリアにしばらく暮らしたことのある芸術家なら誰でもこう自問してみるがよい。古今の芸術の最高傑作を眼前にして、人間の形姿の釣り合い、形、性格を研究し、模倣し、泰然としてゆるぎないあの芸術作品に近づき、感覚的観照を満足させつつ、**精神を最高の領域にまで高めるような作品を創造するために、制作に刻苦精励しようという不断の向上心が自己のうちにひき起されなかってあろうか**。

だがその人も告白することになろう。**帰国後はだんだんとあの向上心も衰えざるをえなかったと。というのも、作品を本当に見、味わい、そしてそれについて考えることができる人はほんのわずかしか見いだされず、たいていは、作品をおざなりに眺め、勝手なことを考え、自分流に感じたり、味わったりしようとしている人しか見られないからである**。［ほんとそうだよなーby奘］

どんなにひどい絵でも感覚と想像力に訴えることができる。それは、そのような絵でも感覚と想像力を動かし、解放し、自由にさせてくれるからである。**最高の芸術作品**もまた感覚に訴えかけるが、それは**より高次の言葉**であって、われわれはむろんこの言葉を理解しなければならない。**そのような芸術作品は感情と想像力を束縛し、われわれの恣意を奪う**。**われわれは完全なものを、好き勝手に処理し、支配することはできない。われわれはそれに自分を委ねないわけにはゆかないのだが、そうすることによってわれわれは高められ、改善され、ふたたび自己を手に入れるのである**。

（芦津訳「**それは感情と構想力とを束縛し、私たちの恣意を奪い去る。私たちは完全なものを意のままに統御し、支配することはできず、そこに身を委ねることを強いられる。それによって高められ、改革され、ふたたび自己自身を獲得するのである**。」）

なんらかの知識にたずさわる人は、**最高のものを目指すべきである**。知的理解と実地の仕事とは大いに違っている。というもの、実際の仕事においては誰でも、自分にはある程度の力しか与えられていないことをやがては知ってそれに甘んじなければならない。ところが知識や知的理解となるとずっと多くの人たちにこれを持つ能力があるからである。それどころか、**自分を捨てて、対象につくことのできる人、強情で、偏狭な我意をはって自己とそのつまらぬ偏見を自然と芸術の最高の作品のなかへ持ちこもうとしない人であるならば誰でも、そのような能力がある**と言えるのである。

（芦津訳「**自己を空しくして対象に従うことのできる人、頑固で偏狭な我意を通し、自己とそのちっぽけな偏見を自然と芸術の最高傑作のうちに持ちこむようなことをしない人ならば、誰しもその能力を有している**と言える。」）

しかし、われわれが**自分のうちにあるものをただ手軽に、また気楽に動かしているだけでは、自己を形成することにはならない**。

（芦津訳「しかし私たちが自己の内部にあるものを安易に、そして快適に働かせるだけでは、自己形成ということはありえない。」）

他の人間と同様、どんな芸術家も個別的な存在にすぎないのであって、つねに一つの面にのみ心を傾けるであろう。

それゆえ人間は、自分の本性に反するものであっても（was seiner Natur entgegengesetzt ist）、理論、実践の別を問わず、可能なかぎり自己のうちに取り入れなければならない。

軽々しい人は真剣さと厳格さを求め、厳格な人は軽やかで快適なものを、強い人は愛らしさを、愛らしい人は強さを念頭に置くがよい。こうすれば誰でも、自分の本性から遠ざかるように思われるだけ、**自分の本性をますます鍛える**ことになろう。（**seine eigene Natur nur desto mehr ausbilden**）

**いかなる芸術も人間全体を要求する。考えうる最高度の芸術は人間性全体を要求するのである。**

●さらに一言、若い詩人たちのために（死後に発見された遺稿）（小岸昭訳）

われわれが師と呼ぶのは、その人の指導によってわれわれがたえずなにかある芸術の修練を重ね、しだいにわれわれが熟達してくるにつれて、実作で憧れの目標にもっとも確実に到達するために従うべき根本原則を段階的に教えてくれる人のことである。

そのような意味においては、**私は誰の師でもなかった**。しかし、一般にドイツ人、とくに若い詩人にとって私がいかなるものになったかを言うようにと求められるならば、私はたぶん彼らの**解放者**であると言うことができるであろう。というのも、人間は内面から生きなくてはならないように、芸術家も、たとえ彼がどんなふうに振舞ってみたところで、**つねにひたすら自らの個性を発揮してゆくほかない**のだから、やはり内面から制作しなくてはならないということを、彼らは私によって知ったからである。

そういう精神で芸術家が生気溌剌とたのしく仕事にむかうならば、彼の人生の価値を、高貴あるいは優雅を、時として生来彼に備わっている優雅な高貴さといったものをも、世に顕すことになるのは間違いない。

それはそうと、私はこうした仕方で誰に影響をあたえたかを、かなり正確に述べることができる。そこから生じてくるのはいわばある種の自然文学であり、そしてこうした仕方に頼るのでなければ、独創的なものは生れてこないのである。

　…というのも、文学においては、他人の、外的な尺度などというのは何の役にも立たないからである。

ところで、なによりも肝要なことを手短かに述べておこう。若い詩人は、たとえそれがどんな形態をとるにしろ、**生きて働きつづけているものだけを表現せよ**。**いっさいの否定的精神、いっさいの悪意や悪口を、そして否定するしか能のないものをきびしく排除せよ**。**というのも、そうしたものからは何物も生れてこないからである**。

●『ドイツ彫刻家協会』1817年７月２７日（新井靖一訳）

　しかしながら、造形芸術においては**考えたりしゃべったりすることはまったく容認しがたく、また無益であり、芸術家はむしろ価値ある対象を自分の目で見ることが必要である**、この理由から彼は非常に古い時代の遺物に心を向けなければならない。

**（zu denken und zu reden ganz unzulässig und unnütz ist）**

そしてそういうものは何といってもペイディアスとその同時代人の作品のうちにしか見出すことができないのである。現在われわれはきっぱりとこのように言うことができる。というのも、この種の申し分ない遺物がすでにロンドンにあるからであり、したがってわれわれはどの造形芸術家にもただちに**適切な典例**を指示することができるのである。（**die rechte Quelle［泉、根源］**）

**それゆえドイツのいかなる彫刻家も、己れの自由にしうる資産のすべてを使って、あるいは友人、後援者、その他の偶然によって彼に与えられるすべてを利用して、英国に旅し、そこにできるだけ長く滞在するようにせねばならない**。というのも、彼の地ではまず第一にエルギンの大理石像が、次いでかの地にあるその他の、博物館に併合されているコレクションが、**およそ人類の住む世界においてこれ以上のものは見出されないような機会を与えてくれるからである**。

　彼の地についたなら彫刻家はなにをおいてもまず**パルテノン**とフィガリア**神殿のほんのわずかな遺物をも大いに気を入れて研究してもらいたい**。（**studiere er vor allen Dingen aufs fleißigste**）

ほんの小さな部分、いや破損した部分からさえも啓発されるところがあるだろう。むろんその場合彫刻家はペイディアスのような人間になることが必ずしも必要でないことを知って、驚くことのないよう心してもらいたい。なぜなら、高次の意味において真の芸術は決して時代に依存することがなく、事実いつの時代にも現われうるものであり、才能ある人は愚かなことをするのをふつうはやらないものであるのに、ペイディアスのあとを追うことによりその後継者たち自身すでにあの厳しい高みから転落しているのが、今現在の状況のうちに十分看取されうるからである。

●「博物学の図解一覧、とくに骨学の図解にたいする要望について」（1819年）

**芸術家は実は根源の馬（Urpferd）を創ったのである。彼がそのような馬を実際に眼で見たのか、心のうちで作り上げたのか、そのどちらにせよ。すくなくともわれわれには、それは最高の詩の心と現実の感覚において描写されているように思われる。（**sheint es **im Sinne der höchsten Poesie und Wirklichkeit dargestellt zu sein）**

●「ラオコーンについて」（芦津丈夫訳）

　真の芸術作品は、自然の作品と同じように、私たちの悟性にとってつねに計り知れないものである。それは観照され、感知される。それは心に働きかけるが、真に認識されることはなく、その本質や価値が言葉で表現されることは、なおさら稀である。

●「**芸術作品の真実と真実らしさについて」**（新井靖一訳）

（では言って下さい。なぜそういう私にも完全な芸術作品が自然の作品に見えるのでしょうか。）

　それは、**その芸術作品があなたのよりよい本性と一致しているからです**。**自然を超えているが、しかし自然の外に出ていない**からです。

　完全な芸術作品は人間精神の作品であり、この意味において**自然の作品**でもあるのです。

　しかしながら、ばらばらな対象が一つにまとめられ、もっとも低俗な対象すらその意義と価値が認められることによって、**芸術作品は自然を超える**のです。

　それは、調和のうちに生れ、形成されている精神によって把握される必要があるのです。そしてこのような精神は、卓越したもの、それ自身で完成したものを自分の本性にも合ったものと思うのです。

●『ウィルヘルム・マイステルの遍歴時代』　「フィディアス」は３巻18章。

　諸芸術はまた**自分自身から多くを生み出し、他方、自然が完全となるに欠けているものを数多く付け加える**、――芸術は自分自身のうちに美をもてるがゆえに。それゆえに**フィディアス**は、何ら肉の眼に見ゆるものを模倣したのではないが、神を刻むことができた。彼は、もしツォイスがわれわれの眼にふれることもあったらこうもあらわれたであろうという姿を心のうちに捉えたのである。

●エッカーマン『ゲーテとの対話』から。

・第三部1831年6月20日

モーツァルトがドン・ジョヴァンニを作曲した、などとどうして言えようか！　作曲する――まるで卵と小麦粉と砂糖をこねあわせてつくる一片のケーキかビスケットででもあるかのようだ！　――それは、部分も全体も**ひとつの精神から一気に注ぎだされ、ひとつの生命の息吹につらぬかれた精神的な創造なのであって、製作者はけっして、試みをおこなったり、継ぎはぎをしたり、恣意的な処置をほどこしたりはしていない。彼の天才のデモーニッシュな精神が彼を支配し、彼はこの精神の命ずることを遂行するよりほかなかったのだ**。（渡辺健訳）

●（中）1829年12月6日。

　そこで私は、**デーモンというものは、人間をからかったり馬鹿にしたりするために、誰もが努力目標にするほど魅力に富んていてしかも誰にも到達できないほど偉大な人物を時たま作ってみせるのだ**、という風に考えざるをえないのだよ。

●（中）1831年3月2日（月）

　デモーニッシュなものとは、悟性や理性では解き明かしえないもののことだ。生来私の性格にはそれはないのだが、私はそれに支配されている。

●（第三部1828年3月11日）

　つまり天才というのは、神や自然の前でも恥かしくない行為、まさにそれでこそ**影響力をもち永続性のある行為を生む生産力にほかならない**のだ。モーツァルトの全作品は、そうした種類のものだ。あの中には、世代から世代へと働きつづけ、早急には衰えたり尽き果てたりすることのない生産力があるのだよ。そのほかの偉大な作曲家や芸術家についても同じことがいえるよ。**フェイディアス（Phidias）**やラファエロは、その後何世紀にもわたって影響を及ぼしたではないか！　…　**生産的な影響を与えつづけないような天才は存在しない**からだよ。

●（上）1826年12月13日（水）

　「たしかに、この若い人には才能があるよ。けれども、なにもかも独学で覚えたというのは、ほめるべきこととはいえず、むしろ非難すべきことなのだ。才能のある人が生れるとすれば、それはしたい放題にさせておいてよいはずはなく、立派な大家について腕をみがいて相当なものになる必要があるからだよ。

　先日私はモーツァルトの手紙を読んだが、彼のところへ作曲を送ってきた男爵にあてたもので、文面はこうだったと思う、

『あなた方ディレッタントに苦言を申さねばなりますまい。**あなた方はいつも二つの共通点が見られますから。独自の思想をお持ちにならないので、他人の思想を借りて来られるか、独自の思想をお持ちの場合は、使いこなせないかか、そのどちらかです。**』

　すばらしいじゃないか？　モーツァルトの音楽について言ったこの偉大な言葉は、他のあらゆる芸術にも通用するのではなかろうか？」

　ゲーテはつづけた、「レオナルド・ダ・ヴィンチはこういっているよ、

…『あなた方の息子さんは、**遠近法と解剖学を十分に習得してから、りっぱな大家に師事させなさい**』と。

　ところがだ、今どきの美術家連中ときたら、師匠のもとを離れるときになっても、まだその二つがろくに分らない始末さ。世の中もひどく変ったものだよ。…

　ところで私も、ドイツの画壇を５０年以上も見てきた。いや、ただ見てきたというだけではなくて、私の方からも働きかけるようつとめてきたのだが、今となって言うことができるのは、すべてが現状のままであるかぎり、ほとんど何も期待できないということだ。時代のよいものをすべてすばやく自分のものにして、それによってすべてのものを凌駕するような偉大な才能が現われなければならないのだ。その手段はすべて目の前にあるし、道は示され、軌道まで敷かれている。**その上今や、われわれはフィディアスの作品までこの目で見ることができるのだ。これは、われわれの若い頃には想像もできなかったことだよ**。」

●『ヴィンケルマン』（芦津訳）

ひとたび芸術作品が産み出され、その理想的な現実とともに世に姿を見せるや、それは持続的な効果をもたらし、最高の効果を発揮する。

なぜなら芸術作品とは全体の力から精神的に展開されるものであり、それゆえ**すべての卓越したもの、尊敬と愛に値するものを取り入れ**、**人間の形姿に魂を吹きこむことによって人間を人間以上に高め**、その生活および行為の円環を完結し、過去と未来とを包括する現在のために人間を神化するからである。

　私たちが古代人の叙述、報告、証言などから解明できるように、かつて**オリュンピアのユピテル**を眺めた人々は、このような感情に捉えられた。

人間を神に高めるために、神が人間になったのである。彼らは至高の尊厳を目（ま）のあたりにし、最高の美に胸を打たれた。

　この意味において私たちは、「**この作品を見ずに死ぬのは不幸である」と心からの確信をもって語った**古代人たちを是認すべきであろう。…

　友情と美の二つの要求が同時に一つの対象において満たされるとき、人間の**幸福と感謝の念**は、きわまるところを知らない。そして人間は、彼の所有物のすべてを、**帰順と崇拝のささやかな印として捧げたいという気持ちになる**であろう。